

あたらしくはいった本 (令和2年7月 貸出開始資料から)

- 小説 サキの忘れ物(津村記久子/著) 黄色い夜(宮内悠介/著) チーム・オベリベリ(乃南アサ/著) 夢は捨てたと言わないで(安藤祐介/著) 日本蒙昧前史(磯崎憲一郎/著) 囚われの山(伊東潤/著) ホーム(堂場瞬一/著) ボニン浄土(宇佐美まこと/著) 黙示(今野敏/著) 魔界京都放浪記(西村京太郎/著) 彼女たちの部屋(レティシア・コロパニ/著) その日の予定(エリック・ヴェイヤール/著) 屋上で会いましょう(チョンセラン/著)
- 随筆・詩などの文学 田辺聖子の万葉散歩(田辺聖子/著) 文豪たちの口説き本(彩図社文芸部/編) 杞憂に終わる連句入門(鈴木千恵子/著) 米寿を過ぎて長い旅(山折哲雄/著) 美女ステイホーム(林真理子/著)
- その他の本 そうざい麵(ワタナベマキ/著) 在宅HACKS!(小山龍介/著) 消滅絶景(ナショナルジオグラフィック/編) 腸内フローラの科学(野本康二/著) 受け師の道(樋口薫/著) 同時通訳者が「訳せなかった」英語フレーズ(松下佳世/編著)



『サキの忘れ物』
津村記久子 著
新潮社



『田辺聖子の万葉散歩』
田辺聖子 著
中央公論新社



『彼女たちの部屋』
レティシア・コロパニ 著
早川書房

みんなの としょかん



市民図書館

TEL (921) 4646

FAX (921) 4896

<http://www.library.dazaifu.fukuoka.jp/>

としょかんカレンダー

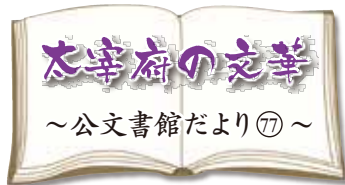
令和2年	日	月	火	水	木	金	土
9			1	2	3	4	5
	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	27	28	29	30			

○のついた日は休館日

金・土曜日(祝日を除く)は午後7時まで開館しています。

応永の外寇と少弐氏

応永の外寇は、応永26(1419)年6月20日〜7月3日、朝鮮の兵船が対馬に襲った事件です。前代の高麗時代より、沿岸部への倭寇(朝鮮半島と中国大陸の沿岸を襲撃する海賊行為を行った集団)の襲撃に苦しみ、たびたび日本側へその禁圧を要請してきましたが、この時はついに倭寇の本拠地対馬を直接攻撃したのでした。少弐満貞は、朝鮮からの船500余艘が対馬津に押し寄せ、自身の代官宗右衛門以下700余騎が応戦、これにより敵軍の大半は討死あるいは捕らえられたこと、中国船2万艘が来襲するはずだったのに、大風によって大半は海に沈み、ことごとく国に帰ったこと、安楽寺(太宰府天満宮)などで種々の奇瑞(めでたいこと)の前兆として起こる不思議な現象)が起こったことなどを、室町幕府將軍足利義持のもとに使者を送って報告しています。実際に到来した朝鮮船は227艘でしたし、大半が討死したという事実もなく、中国船来襲の件にしても荒唐無稽な話で、いずれも満貞の誇張と考えられますが、幕府と明との関係が悪化していた時期でもあり、そのまま信じられてしまいました。蒙古襲来の時のよ



～公文書館だより⑦～

うに、大風によって敵船が沈没した、奇瑞が起こったとするのは、神国思想の高揚が窺え、興味深いです。翌年8月、朝鮮の使者宋希環(ソンヒヒョウ)が来日します。將軍義持のもとを訪れたところ、食事もないほどの冷遇を受け、不審に思った宋希環はその原因が応永の外寇にあることを知ります。そこで、外寇の原因があくまで倭寇にあること、朝鮮側には日本攻撃の意志がないことなどを義持に釈明しなければなりません。少弐氏は、鎌倉時代には三前二島(筑前・豊前・肥前・対馬・吉岐)の守護を勤め、大友氏とともに九州御家人のトップの位置にいましたが、南北朝の内乱期を通じて次第に勢力を減退させており、このころは筑前1国の守護で、そもそも対馬守護でもありませんでした。また、博多を拠点とする九州探題(しんが)頼(たの)とは、同じ筑前を基盤とすることから、内在的な競合関係にありました。こうした少弐氏をとりまく状況が、応永の外寇における少弐氏の報告の誇張につながったのかもしれない。

公文書館 朱雀 信城